日本人の断り表現と
ラポールマネジメントに関する一考察

野　木　園　子

1．はじめに

日本人の誘いに対しての断り方は、「察し」てもらうことを期待する為、曖昧で分かりにくいということがしばしば指摘されている。Beebe, Takahashi, T. & Uliss–Weltz.（1990）は、日本人はアメリカ人と違って断るとき曖昧な表現を使い、その理由について細かい説明をしない、また、曹（2001, p. 216）は、日本式の「断りのストラテジー」は、具体的な断り表現を伴わないと主張している。更に、水谷（1979, pp. 108-109）によれば、相手の意志に逆らう「いいえ」は使いづらいと言う。しかし、筆者は、これらの意見は一方向的なのではないかと疑問を持つ。確かに、断られた相手を傷つけないようにするという配慮から、日本人においてはより婉曲的な「断り」表現が見られるという側面もあるのかもしれない。しかしながら、こういった使い方は、相手との親しさの度合いによってかなり異なるのではないだろうか。特に、親しい間柄の人間関係においても曖昧な答え方をするものだろうか。

人との「関係性のコミュニケーション」を見ていく上で、しばしば問題にされるのは「ポライトネス」という考え方である。ここで言うポライトネスとは、日本語で言う「丁寧さ」よりも広義の意味で、必ずしも敬意表現とは限らず、親しい間柄において、わざと丁寧でない表現を用いることも含む。スペンサー ー オーティ（2004）によれば、ポライトネスとは、状況判断であり、話し手はどんな状況で何を言うかによって、 礼儀正しいか無礼かを判断される、つまり、適切さの問題で

あって、言語形式は関係ないと主張している。

そして、Brown & Levinson（1987）のポジティブ・フェイス、ネガティブ・フェイスの概念[1]は、社会的もしくは相互作用的な側面が欠落しているという点で不十分であるとして、「ラポールマネジメント」、言語使用の持つ社会的関係の維持・管理という機能、という概念を導入している。これは「フェイス」が自己への関心を強調するのに対して、自己と他者間のバランス、調和的関係「ラポール」の方により強い関心を示すものである。ラポールマネジメントには、フェイスマネージメント[2]と社会的権利のマネージメントという２つの側面がある。そして、フェイスは、更に、資質のフェイスと立場のフェイスから成る。資質のフェイスとは、個人的な資質、つまり自分の適性、能力、外見等によって、人々に評価されたいという基本的欲求であり、立場のフェイスとは自分の社会的立場もしくは役割、例えば、グループの指導者であること、お得意さまであること、親友であることなどを、人々に認め、また支持してもらいたいという基本的欲求である。

同様に、社会的権利もまた公平の権利と交際の権利という側面を持つ。公平の権利とは、他者から個人として配慮され、公平な扱いを受ける権利があるという基本的信念である。交際の権利とは、他の人々とお互いの交友関係にふさわしい付き合い方をする権利がある、という基本的信念である。これは人とどのような関係を持つか、そしてどの程度深く関わるか、また、どの程度まで関心、感情、興味を共有するかという問題とも関連している。

本稿では、誘いに対して、「断り」という発話行為を親しい間柄において日本人話者がどのように表現するかを調査し、その結果を「ラポールマネジメント」という概念を鍵として考察することを目的とする。

2．調査方法

データ収集は2004年７月から2005年３月にかけて行った。「今度の日曜日もしよかったら映画にでも行きません？」という質問を，筆者の友人、40～50代の女性で

映画に誘っても不自然でない関係の人、20名に、面と向かって、または、電話で行った。この質問を選んだ理由は、映画に誘うという言語行為が、日常的であると考えたからである。質問に先立って、これから筆者がするある誘いに対して、断わってほしい ― 但し、前提として、本当は行こう思えば行けるが、気が進まないという状況を想定してほしい ― 旨を告げておいた。筆者の最初の問いかけ後は、回答者に応じてロールプレーを行った。そして、その後、なぜそのような応答をしたのか（理由）についてインタビューを行った。ロールプレー、インタビューは、本人の了解のもとカセットテープに録音した。

３．結果と分析

（１）意味公式による「断り」表現の分析と具体例

データは、岡本等（2003, p.190）の用いた意味公式に多少修正を加えたものを使い分析した。表１にその意味公式と調査の結果実際見られた例をあげる。尚、意味公式とは「断り」表現をその意味内容に従って分類したものである。

表１「断り」表現の意味公式と実際見られた例

①感謝（相手の行為に対する感謝の表明） 例：ほんと、どうもありがとう
②情報（相手の発話内容を確認） 例：映画ですか？映画、どんな映画ですか？／今度の日曜日ですか？／何時ごろ？
③共感（相手の意向に添いたい心情の表明） 例：せっかくなんですけれども／気持の上では行きたい気持はあるんだけど／映画かー、いいよねー
④理由（相手の意向に添えない旨の説明） 例：具合悪いんですよ／風邪ぎみで／子供がインフルエンザなもので／先約

があるので
⑤結論 （直接的な表現の断り） 例：行けないんですよ／ダメなのよね／映画っていう気分じゃないんだよね （婉曲的な表現の断り） 例：むずかしいかも／ちょっと今日パスしておいて／今回は見送らせてもらおうかしら／都合が悪くて
⑥謝罪（相手の意向に添えないことに対する詫び） 例：ごめんねー／すみません／申し訳ないんですけど
⑦関係維持（相手との関係を維持する為の働きかけ） 例：是非、また一緒に行きましょう／是非、是非楽しみにしております／よろしくお願い致します
⑧間を持たせる表現 例：あー／えーと／そうねー／うーん
⑨自問的な文末表現 例：具合悪いかな、今は／用事あるかな／なんかあったような気がするんだけどな
⑩中途終了文 例：別の約束があって行けないんですけれども／ちょっと、まだね、コンディションあれだから

表１の意味公式にそって、談話の一部を分析してみる。（それぞれの番号は意味公式の項目の番号である。）

＜例１＞

回答者：⑧あのー、②時間は？

筆　者：あっ、時間は、私一日空いてるから何時でもいいよ。

回答者：⑧あー、そうなんだ。⑧んー、ちょっとね、⑧んー、⑤昼間、ちょっと映画見れないかも。④時間が空かないかもしれなくて、⑩夜とかになっちゃうんだけれどもー。

筆　者：ん、あ、そんなの別に私は別に構わないんだけど。

回答者：ほんとに?　でも、⑧んーほんと、⑧えー、④あまりちょっとその日時間が取れないんで、映画見るだけとかになっちゃうんだけれども、いいのかな？

＊　＊　＊

回答者：③ねー、なんか、やっぱりちょっとお茶ぐらいしたいもんねー。

筆　者：そうだね。わかった。

回答者：⑥ごめーん。

筆　者：じゃ、あの、また今度にしましょう。

回答者：⑥すいませーん。また、⑧あの、⑦⑩時間できたらこちらから電話するんで。

（＊録音の書き起こしに関しては、あいづちは省略し、二人の発話が重なっているところも記述していない。）

（2）意味公式による「断り」表現の分類

＜例１＞で示したように回答者の談話を分析し、意味公式の使用者数とそのパーセンテージを以下の表に表した。

表２　意味公式の使用者数（20名中）とそのパーセンテージ

項　目	使用者数（人）	項　目	使用者数（人）
①感　謝	1（ 5%）	⑥謝　罪	14（ 70%）
②情　報	10（50%）	⑦関係維持	13（ 65%）
③共　感	7（35%）	⑧間を持たせる表現	20（100%）
④理　由	18（90%）	⑨自問的な文末表現	5（ 25%）
⑤結　論	［直接］4(20%) ［婉曲］5(25%)	⑩中途終了文	14（ 70%）

①「感謝」の表現を使用した回答者は１名だけだった。これは誘ったのが回答者と親しい間柄にある筆者であるということと無関係ではないように思える。親しい間柄なのだから、わざわざお礼を言わなくても、といった気持が働いたのではないか。②「情報」に関しては半数の回答者が使用した。これは、断るにしても、取りあえず最初のうちは相手とやり取りしつつ、様子を見ている、または、いきなり断ることへの躊躇なのではないかと推測する。④「理由」は90％の回答者に見られた。これに関しては後で詳しく述べる。⑤「結論」の表現は、直接的にしろ婉曲的にしろ、45％の回答者に見られた。⑥「謝罪」は70％の回答者に見られた。これは、相手の意に添えないこと、相手を傷つけたことに対しての配慮、申し訳なく思う気持を表現したいということなのだろう。⑧「間を持たせる表現」は全員の回答者に見られた。これは、断ることに対して回答者が躊躇するということの表れであろう。⑨「自問的な文末表現は４人に１人が使用し、⑩「中途終了文」を使用した回答者は70％に及んだ。これらについては後で更に述べる。

（3）４パターンの「断る」理由

今回見られた「断り」表現を、その断る理由に応じて４パターン、「正直な気持を述べて断るケース」、「自分自身の事情に絡ませて断るケース」、「他の人に絡ませて断るケース」、「その場で断らないケース」に分類した。

1）正直な気持を述べて断るケース

これは理由として、回答者の状況に応じて正直な気持が述べられているケースであり、４名（20％）いた。その内３名は、＜例３＞、＜例４＞のように、理由を長く説明し、共感、及び、関係維持を表す表現を用いた。誠実に丁寧に自分の本当の気持を表している感がある。回答者によると、正直な気持を述べた背景には筆者との親しい人間関係があり、率直に言った方が良いと思ったとのことだった。

＜例２＞

回答者：あー、映画かー、いいよねー、最近見てないし。

筆　者：うん。

回答者；なんか、ちょっとここんとこ疲れててさー。映画って言う気分じゃないんだよね。ちょっとねー、寝るわ、たぶん。

＜例３＞

回答者：ハリーポッターね。そうですね。えーと、そうですね。あのー、時間はあるんですけども。あるんですけど、今やりたいことがあるっていうか、やることがたくさんあって、えーと、そちらを片付けてから、あの、ゆっくりした気分で行きたいなと思っているんですけど、って言うか、あのー、やらなくちゃいけないことが。片付けて、全部終わって、そしたら、ま、ゆっくりね、映画でも見たいとは思っているんですけど。

筆　者：あっ、分かりました。また、もうちょっとしたらということにしましょうかね。

回答者：そうですね。私、映画好きなのでね、見たいのは山々なんですけど、あの、終わって、またそのとき、いい映画がやってたら、見たいとは思ってるんですけど。是非、また、あの、誘ってくださいね。

＜例４＞

回答者：……ちょっと率直に言わせてもらっていいかしら。私、あの、同人誌に入っていて、その、短歌の同人誌なんだけど、〆切がちょっとね、23日なの。だから、私、短歌を10首作っていつも毎月出しているんだけど。ちょっと、まだ全然出来てなくて、気持の上では行きたい気持はあるんだけど、ちょっと日曜日、あの、映画に行ってしまうと、あとが苦しくなるかなと思って。えーと、ごめんなさい。

筆　者：あ、わかりました。そういうことならしかたないですよね。

回答者：ごめんなさい。是非行きたい気持はあるんだけど、ちょっと、そっちの方が、〆切の方が、ちょっと差し迫っていて。

筆　者：わかりました、よく。じゃまたの機会にしましょう。

回答者：是非また一緒に行きましょう。

2）自分自身の事情に絡ませて断るケース

これは、断る口実として自分自身に関連する事柄を理由にしているケースで、9名（45%）に見られた。「用事がある」、「具合が悪い」、「仕事がある」などである。回答者によると、自分自身の都合に絡ませるのが差し障りのない、または、無難な言い訳、と答えた人が多かった。

＜例5＞

回答者：あー、映画見てないんでほんとは行きたいんだけど、ここんとこ具合悪いんですよ。なんか風邪っぽくって良くないの。

筆　者：あーそーですか。いけませんね。じゃ、またそのうち。

回答者：行きたいんだけど、具合悪いかな、今は。

3）他の人に絡ませて断るケース

第三者を口実として使っている表現をこのケースに分類した。6名（30%）の回答者に見られた。「家族と出かける」、「友達が帰って来る」、「子供がインフルエンザ」などである。回答者によると、自分自身の言い訳だと咄嗟に出てこなかった為、第三者に絡ませた、あるいは、第三者をダシにする方が害がないという意見が多かった。

＜例6＞

回答者：えっとね、友達が、あの、アメリカから、あのちょっと、帰ってくるんで、彼女の予定を聞いてみないとわからないんでー。ちょっと、行けないんで

すよ。

筆　者：あ、そうですか。じゃ、また。しょうがないですね。また今度行きましょう。

回答者：はい、はい、すみません。

4）その場で断らないケース

これは、答を先送りしているケースで、１名（５％）いた。回答者曰く、一旦電話を切って、相手を傷つけずに断る方法を考え、その後遅くとも翌日には断りの電話を入れるそうである。相手が親しい人の場合は即座に断れないのは性分で、嫌いな人、親しくない人であれば、その場で断ることに何の躊躇もないとのことであった。

＜例７＞

回答者：今、予定見ないと分からないから、今、生返事できないので、また、じゃ、折り返し、ちょっとメモ帳、メモ帳って言うか、自分の手帳見て、スケジュールをもう一回確認してから、あの、折り返し電話します。

（4）具体的でない「断り」の理由

ここでは、理由が具体的であるかどうかを検討した。「用事がある」、「都合が悪い」、「別の約束がある」、「先約がある」は、どのようにでも受け取れる為、具体的でない理由とみなした。６人（30％）がこれに当てはまる。回答者との談話は短い傾向にあった。

＜例８＞

回答者：あー、今度の日曜日はね、ちょっと用事があるんだよね。

筆　者：あ、そうなんだ。

回答者：ん、ごめんねー。

筆　者：ん、じゃ、また他の日にでも。
回答者：ん、また是非誘って下さい。

（5）「断り」における自問的文末表現と中途終了文

自問的心的態度を表す文末表現「～かな」「な（あ）」は、相手に対して直接「不可」を表明するのではなくて、自分自身に問いかけるような意味を示すことによって「断り」を和らげる効果がある。（ラオハブラナキット，1997，p.104）また、中途終了文も、直接的表現、断定をさける傾向にある「断り」表現においてよく見られる（生駒他，1993，荒巻，1999）。

＜例９＞
回答者：ん、あ、ちょっと日曜日……ね。（中途終了文）
筆　者：用事ある？
回答者：用事あるかな。（自問的文末表現）

４．考　察

以上、「断り」表現について見て来たが、大方の回答者は断る理由を明確に述べ、少なくとも、日本語母語話者同士であれば意志の疎通に支障をきたすような曖昧性は見出せなかった。従って、40～50代の女性で、親しい間柄の友人間において、という今回の調査結果に限ってだけ言えば、日本人の断り表現は曖昧であるという指摘は成り立たないことになる。

さて、「ラポールマネジメント」という概念を使って今回の結果を説明してみたい。誘いを断るという言語行為は、主に、立場のフェイスと交際の権利が係わっていると思われる。断る側は、誘ってくれた人の、友人であるという関係を維持したいという立場のフェイスを脅かしたくないと同時に、また自分の立場のフェイスも失いたくないという欲求があると考えられる。また、他の人と、お互いの交友関係

にふさわしい付き合い方をする権利があるという、相手の交際の権利を脅かしたくないと同時に、自分の交際の権利も失いたくないと感じたのではないか。

断る理由として、正直な気持を述べた回答者の説明は長く、共感、関係維持を表す表現を多用する傾向にあった。これは断られる人との調和的関係を脅かす可能性のある言語行為を和らげる効果があり、意識してか、せずしてか、発話者は自身の表現を選んだのであろう。一方、具体的でない断り表現を用いた回答者の談話は短い傾向があり、これは、これ以上突っ込んで聞いて欲しくない、事情を察して欲しいという断る側の心理が働いた為だと推測する。通常は日本人話者同士であれば、誘った側がお互いのラポールを保つ為に、あれこれ詮索せずその話題を終わりにするのであろう。

更に、「結論」を述べた回答者は半数弱しかいなかったが、これは日本人のコミュニケーションにおいては、「理由」さえ伝われば必ずしも「結論」を言う必要がないことを示している。むしろ、それを言わないことによって相手の「フェイス」を脅かす発話を回避しているのではないかと考える。また、「謝罪」の表現を使用した回答者が多数いたが、これは断る側と断られる側という両者間のバランスに乱れが生じる為、そのバランスを回復する為に取る行為と言えるのではないか。

ロールプレー後のインタビューにおいても、多くの回答者は発話の動機として、「相手を傷つけたくなかった」とか「相手を配慮して」のように答えたことから相手（筆者）の立場のフェイスを脅かさないように気を使っていたことが分かる。と同時に、回答者自身の立場のフェイスも失いたくないということなのであろう。更に、「今後も交友関係を続けて行きたい」や「長くお付き合いしたい」との理由から、断る口実を考えた回答者にとっては、筆者の交際の権利を脅かすことをさけると共に、回答者自身のそれも失いたくないという意識が働いたのではないかと推測する。

5．おわりに

友人である20名の回答者と筆者との関係は、出会った時の年齢、場所、立場、親しさの度合い、回答者の性格などにより微妙に異なる。それが、どの程度「ポライト」に話したら適切かという問題と関わり、回答者それぞれの表現形式を選択することになったと考えられる。すべての回答者は、親しい間柄で比較的断り易いときでも相手とのラポールを形成すべく言語行為を行っているのである。

しかしながら、ここで興味深いことは、筆者との親しい関係から、率直な気持を述べた方が良い、または、親切と考える回答者がいる一方で、親しい相手だからこそ、気を使い、率直には言えないと考える回答者がいることである。とりわけ意外だったのは、「誘った人が自分にとって親しい場合は、その場で断れない」と答えた回答者（＜例８＞参照）が１名いたが、筆者は、この友人とは中学校、高校を通じてテニス部で一緒に活動をした。そして、彼女は、その部のキャプテンであった。何ごとに対しても、きびきび、はっきりものを言う性格（であると信じていたの）で、「断る」という発話行為にそれほどまでに躊躇する人であるとは、この時までまったく思っていなかった。したがって、筆者にとって彼女が上で述べたような、言語行動をとったということは非常な驚きであった。この例からも分かるように、ラポールマネジメントは個々人によってかなりの開きがあり、言語行動をステレオタイプで判断するのはナンセンスだと言うことを忘れてはならない。

また、視点を変えて、断られる側の立場からすると、しかし、これはあくまでも筆者に限っての感想であるが、断る理由として、「用事があって」や「都合が悪くて」といったような、当たり障りのない、つまり、具体性のあまりない、どのようにでもとれる返答よりも、「疲れていて映画っていう気分じゃないんだよね」にしろ、「時間はあるんですけど……今やりたいことがある」にしろ、「映画に行ってしまうとあとが苦しくなる」にしろ、正直な気持を述べてくれた回答者の方の返答に、より好感を持った。したがって、断る側としては、少なくとも親しい間柄においては、なるべく正直に、誠実に気持を伝えることが大切なのではないかと考える。こ

のように、断られる立場に20回たったことにより、断られる側の気持に関して新たな発見があったことは、この調査によって得た余得であった。

最後に、今回の調査では被験者を親しい間柄の友人に限定したが、今後の課題としては、目上、または、親しくない相手に対しの発話行動も調査し、比較することが必要であると考える。

注

＊本稿は、2005年２月、立教・異文化コミュニケーション学会で発表した内容に加筆したものである。

1）Brown and Levinson によれば、フェイス（face）とは、社会の構成員である誰もが持つ公の自己像のことであり、次の二つのフェイスがあるとしている．ポジティブ・フェイス（positive face）は、他者から認められたい、評価されたいという欲求であり、ネガティブ・フェイス（negative face）は、他者から自分の領域を侵害されたくない、自由を制限されたくないという欲求である。

2）スペンサー ― オーティー は、フェイスを「ある接触の中で、他者によって想定される立場によって、人が事実上要求する肯定的な社会的な価値」（p. 14）と定義している。

＜参照文献＞

- 荒巻朋子（1999）.「アメリカ人と日本人の断り表現の比較」『長崎大学留学生センター紀要』第７号、105-135頁.
- Beebe, L.M., Takahashi, T. & Uliss-Weltz, R.（1990）. Pragmatic transfer in ESL refusals. In R.C. Scarella, E. Anderson & S.C. Krashen（Eds）. *On the Development of Communicative Competence in a Second Language*（pp.55-73）. New York：Newbury House.
- Brown, P. & Levinson, S. C.（1987）. *Politeness：Some Universals in Language Usage.* Cambridge：Cambridge University Press. First published as part of Easter N. Goody（Ed.）（1978）. *Questions and Politeness.*
- 生駒知子・志村明彦（1993）.「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：「断り」という発話行為について」『日本語教育』79号、41-52頁.
- 水谷修（1979）.『話しことばと日本人 ― 日本語の生態』創拓社.
- 岡本佐智子・鈴木明美・Stephen Toskar・楊暁安（2003）.「「勧誘」と「断わり」における言語文化 ― 日本語・英語・中国 語・ロシア語の比較から ― 」『北海道文教大学論集』第４、189-202頁.
- スペンサー ― オーティー，ヘレン（編著）（2004）.『異文化理解の語用論 ― 理論と実践 ― 』研究社.［原著：Spencer-Oatey,H.（2000），*Culturally Speaking：Managing Rapport through Talk across Cultures.* New York：Continuum Publishing Company.］
- ラオハブラナキット　カノックワン（1997）「日本語学習者にみられる「断り」の表現：日本語母語話者と比べて」『世界の日本語教育』第7号、97-112頁．国際交流基金日本語教育センター.
- 曹泰和（2001）.「「断わり表現」における日中の認識差」『中国21』愛知大学現代中国学会、201-220頁．風媒社.